



私の一冊

近藤 康史

『左派の挑戦』 理論的刷新から

ニュー・レイバーへ』

近藤康史著（木鐸社）

【中央 309. 333 - Ko73】



学生あるいは一般の人々からよく投げかけられる質問で、なかなか答えづらい質問がある。

「（政治家などの人名、あるいは政党名）は、左（翼）ですか？それとも右（翼）ですか？」

「（同上）は、保守でしょうか、革新でしょうか。」

例えば、現在の日本政治を念頭において、「民主党」や「田中康夫」といった名前を当てはめてみてはいかがだろうか。現在、右 左、保守 革新の軸は揺らぎ、その指標は見えにくい。社会主義の崩壊、冷戦の終焉、日本においては55年体制の崩壊といった過程の中で、それまで不変とすら

思われた構造が解体され、右 左、保守 革新の意味も変化しつつある。これは日本だけの状況ではない。ヨーロッパ諸国においても、次々と左派政権が実現する中、イギリス労働党であれ、ドイツ SPD であれ、その姿は従来捉えられていた「左翼」政党とは姿を異にしており、やはりそれらが「右なのか左なのか」「保守なのか革新なのか」という点で、一般の市民ばかりか研究者の評価も分かれている。本書は、このような状況について、イギリスの政治理論や労働党を採り上げて考えてみたものである。

しかしながら、本書は単に「左派」についてのみ論じたものではない。現在の日本においてマスコミや論壇を賑わせている無党派層や政治不信の事例を見るまでもなく、右派政党であれ左派政党であれ、その統合能力の低下は否定しがたい。おそらく上記のように、これまで前提とされてきた指標が失われたことも一因であろう。この状況の中、どのような政治的統合が可能なのか、という論点こそが本書の最大の焦点である。

おそらく、そのような無党派層の中心をなす若い世代に、今のところ筆者も世代的には属すると思われるので、そのような世代と価値や発想を共有しうる者による分析として、本書が一定の新しさや価値を持つことを期待している。現在、従来型の政治に対してわかりにくさや不信感を感じている方にこそ、読んで頂ければ幸いである。

（こんどう・やすし 社会科学系講師）

